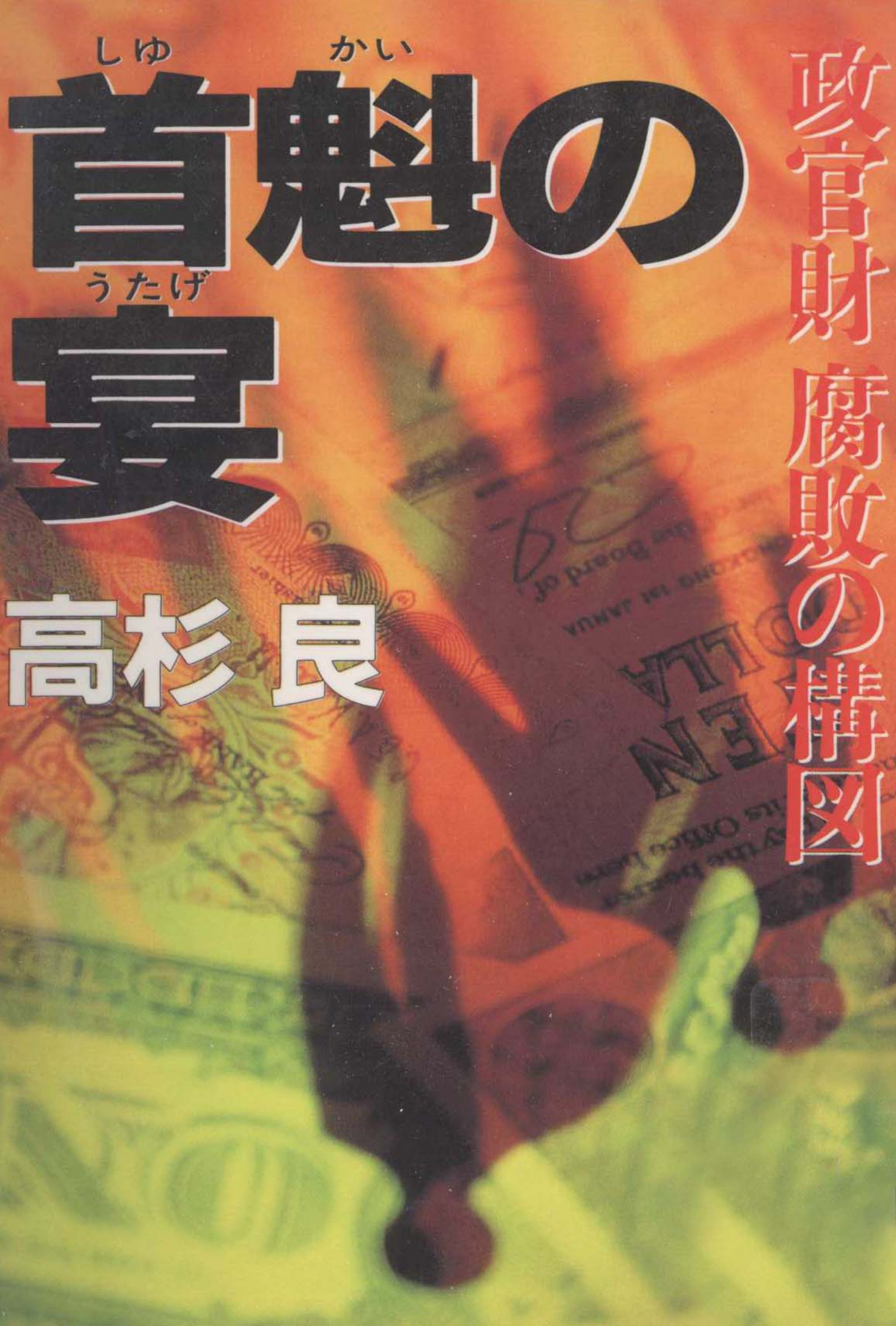


しゅ かい
首魁の

うたげ
宴

高杉 良

政官財
腐敗の
構図



しゆかい うたげ せいかんざい ふ はい こうず
首魁の宴 政官財 腐敗の構図

たかすぎ りよう
高杉 良

© Ryo Takasugi 1998



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

1998年10月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。 (庫)

ISBN4-06-263906-8

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

江苏工业学院图书馆

藏书章

盲魁の宴

政官財 腐敗の構図

高杉 良

目次

第一章	再会	5
第二章	叙勲プロジェクト	52
第三章	書き入れ時	82
第四章	ロスで“歩こう会”	106
第五章	情事のあとで	145
第六章	腐れ縁	181
第七章	目糞鼻糞	211
第八章	亀谷総合病院で	232
第九章	逆転人事	282
第十章	本領発揮	319
解説	佐高 信	357

本書は文庫のために特別に書き下ろしたものです

第一章 再会

1

株式会社産業経済社社長・隔週刊経済誌「帝都経済」主幹の杉野良治りょうじの妻、文子ふみこが肺癌で幽明境さかいを異にしたのは、平成七（一九九五）年十二月二十九日正午二十分過ぎのことだ。

杉野は午後二時過ぎに都内を走行中の専用車リムジンの中で妻の訃報を聞いた。

電話をかけてきたのは秘書役の古村綾あやである。綾は四十六歳。名刺の肩書は秘書役だが、産業経済社のナンバー2で、財務・経理部門を一手に握っていた。

「文子さんが亡くなったそうよ。たったいま、治子さんから電話があつたわ」
狎れが出ているのは仕方がないが、いつになく緊張気味で声がかすれていた。

「ふうーん。治子から……」

「そうよ。治子さんよ。わたしが直接電話に出たから間違いないわ。治子さんも、わたしだとわかったみたい。よそよそしいっていうか、つんつんした感じの電話だったわ。『一応お

知らせしますが、遺体は三田のマンションに運びます。喪主は兄になるそうですから、父にそう伝えてください』とか言ってたわよ」

「莫迦者！ そんなわけにいくか！」

杉野が胸間声を放った。阿修羅の形相に近い。運転手は慣れたもので、バックミラーをちらっと見上げただけだった。

「わたしがあなたに怒鳴られるいわれはないでしょ」

綾は冷静だった。杉野も落着きを取り戻した。

「瀬川を呼び出して、電話するように言ってくれ。あと五分でコスモ銀行に着いちやうが名誉会長室につないでもらってかまわん」

瀬川誠は産業経済社の副社長だ。杉野の側近中の側近を自他共に認めている。杉野の言いなりに動く。四十八歳とまだ若いのが、要領のよさで持っているような男だ。

年末年始の挨拶で、杉野が自ら出向くのはコスモ銀行名誉会長の大山三郎と、大手百貨店まるそう会長の田宮弘の二人だけだ。大山は八十六歳。田宮は八十三歳。

二十数年前、「帝都経済」の創刊時に杉野のスポンサーになってくれた大企業のトップたちで、いまだに存在感があるのは二人だけになった。

杉野が、頭が上がらないのはこの二人だけで、あとは十把ひとからげ、自分より遥かに格下の財界人ばかりということになる。

もう一人、頭の上がない存在として総合化学大手、栄和産業名誉会長の佐藤正雄（八十

二歳）が存在するが、佐藤は財界活動から退き、趣味の画筆に没入している。佐藤とは共著もあり、別格ということになるうか。

杉野が大山と談笑している絶妙のタイミングで、瀬川から電話がかかった。

大山付きの中年女性の秘書が広々とした名誉会長室に顔を出し、その旨を告げた。

「杉野先生、瀬川様からお電話が入っておりますが、おつなぎしてよろしいでしょうか」
杉野は鷹揚に返した。

「お願いする」

秘書がセンターテーブルの電話から受話器を外し、「こちらに回してください」と言つて、瀬川の声を確認してから、受話器を杉野に手渡した。

「どうぞ」

「失礼します」

杉野はソファに坐つたまま、大山に目礼して電話に向つた。

「もしもし」

「もしもし、主幹ですか。瀬川ですが……」

「主幹だが、どうした。なにかあつたのか」

「古村さんから、主幹の奥様がお亡くなりになつたとお聞きしましたが。至急主幹に電話をするようにと……」

「えっ！ 家内が亡くなつた……。そうかダメだったか。きみ、すまんがすぐ病院へ行つて

くれ。とりあえず遺体を浜田山の家に運ぶ手配も頼む。あとで連絡する。じゃあ、よろしくな」

杉野は社員に対して一人称は「主幹」で通している。大山の前でさえ、改めることはなかった。

「杉野君、奥さんが亡くなったのかね」

大山に訊かれた刹那、杉野の涙腺がゆるんだ。もはや涙滂沱である。

「そんなに悪かったのかね」

「末期癌で、手の施しようがありませんでした」

「知らなかった……」

「大山名誉会長にご心配をかけたくなかったのです」

杉野は肩をふるわせて、せぐりあげながらハンカチで何度も涙と涙を拭った。

大山も、もらい泣きで目頭を熱くしている。

杉野が大山の前で落涙したのは、これで二度目だ。

「帝都経済」の創刊時に、当時頭取だった大山は紹介状替りの名刺三十枚にハンコをついて、杉野を感涙にむせばせた。

「中身はまかせる。僕の名刺は効きめがあるよ。皆んなきみのスポンサーになってくれること請け合いだ」

「ありがとうございます。大山頭取のご恩は一生忘れません」

杉野が大山の懐^{ふところ}深く飛び込んだ瞬間だった。

杉野に大山を紹介したのは、大手鉄鋼会社大日本製鉄の長岡武だ。長岡は鬼籍入りして久しいが、杉野は若かりし頃、老人キラーを以て任じていた。

「名誉会長、これで失礼します。良いお年をお迎えください」

「杉野君は大変な正月になっちゃうねえ。なぐさめる言葉もないよ」

「わたしは仕事にかまけて女房孝行ができませんでしたから、せめて供養してやらなければ……」

後は言葉にならなかった。

2

「おい。瀬川を呼び出してくれ。多分車の中だろう」

コスモ銀行本店ビルから、まるそう東京本部に向かうリムジンの中で、杉野が中年の運転手に命じた。

「かしこまりました」

運転手はリムジンを道路の端に寄せてから、自動車電話をかけた。

「話し中です。いかがでしょうか」

「瀬川のことだから、葬儀屋に連絡してるんだろう。田宮さんを待たせるわけにはいかん。」

車を出してくれ」

リムジンがまるそう東京本部に着く前に、杉野はもう一度、運転手に電話をかけさせた。

「つながりました」

「主幹だが、話し中だったなあ。いまどこにいるんだ」

「間もなく病院に着きます。大手の葬儀社の幹部と話してたんですが、火葬場の関係で、一月四日までは茶毘に付すことはできないそうです。一応一月四日午後一時から三時まで新宿の大成寺を押えておきました。仏式に限らず、神式の葬儀も可能ということでしたので……」

「それでいい。今夜は仮通夜ということになるな。通夜は仏式でいいだろう」

「新聞社はどうしましょうか。死亡記事を書かせてくれると思いますが」

「そんな必要はない。全社員を動員して、手分けして電話をかけまくれ」

「その手配は済んでいます」

「そうか。主幹は午後五時までスケジュールが詰まってるから、そのつもりでな。仮通夜の手配も瀬川にまかせるから、よしなに頼む」

「承知しました」

涙はとつと乾いていた。杉野の涙腺は緩急が自由自在で、都合よく出来ている。

いま、杉野の頭の中は香典をどれだけ集められるかで一杯だった。

「取り屋」の面目躍如たるものがあつた。「鬼のスグリヨ」^{スグリヨ}と称されるゆえんでもある。

すべての沙汰はカネ次第だ。

曾根田弘人元総理、武井守元総理ら大物政治家がスギリョーを支援し続けているのは、金玉を握り合う仲で、もたれあっているためとも言えるし、腐れ縁で切るに切れない仲だからとも言えるが、恐喝まがい、詐欺まがいの悪事を働きながら、スギリョーに司直の手が伸びないのは、大物政治家に担保しているためとみてさしつかえない。被害者のはずの財界が被害届けを出さないこともある。

スギリョーが塀の中に落ちれば、大物政治家や大物財界人だつて危ない。きわどい均衡を保てるのは、運命共同体だからこそなのだ。

スギリョーの正妻の死と法事の日程はあつという間に政財界の隅々にまで伝わった。

その結果、香典をいくら包むか、をめぐつて大企業の広報部長、秘書課長らは電話で意見を交換し合った。

「十万円ですかねえ」

「慶事ならぬ弔事ですから、五万円でしょう」

「おたくのトップは、スギリョーとは格別お親しいようですから、十万円でもかつたるんじゃないですか」

「とんでもない。御社の相談役こそ、若かりしころからスギリョーに入れあげてるそうじゃないですか」

広報部長、秘書課長たちは冗談抜きの本気で、そんなやりとりをしていたのだから、鬼

の「スギリョー」の威力は凄まじい。彼らは口でこそ「スギリョー」と呼び捨てにしているが、面と向かえば足がすくみ、膝頭をふるわせながら「杉野先生」とこめつきバツタに変身する。

3

杉野は妻の最期を看取ることはしなかった。

文子がお茶の水にある大学病院に入院したのは平成六年九月末だが、すでに手遅れだった。

杉野が入院中の文子を見舞ったことは一度もなかった。

しかし、特別室の病室は、杉野とつきあいのある企業から贈り届けられる花でいつもいっぱいだった。多額の見舞い金を平河町のオフィスビルの十階にある産業経済社に届けてきた企業も十数社に及ぶ。

文子の最期を看取ったのは、長男の文彦と長女の田宮治子の二人だ。文彦は三十四歳、治子は三十二歳。治子は、杉野が自著で産業経済社から上梓した『信仰は勁し』の中で、『産業経済社の守護神』『究極の宗教』とまで崇めている『聖真霊の教』に入信しないことなどを理由に、勘当されたが、文子の入院以降、なしくずしになりそうな雲行きだった。

もつとも、治子にとって、父の勘当など痛痒も感じなかった。

治子は、母と兄家族が住んでいる三田のマンションには大手を振って出入りしていた。杉野と文子は別居して久しく、事実上夫婦の体をなしていなかったのである。

文子の遺体が病室から移された霊安室で、文彦が右手の甲で涙をぬぐいながら言った。

「お母さんの遺体は三田のマンションに運びたいと思う。喪主は僕がなる。親父には知らせなくていいんじゃないか」

普段口数の少ない文彦の毅然とした口吻に治子はたじたじとなりながらも、言い返した。

「それはどうかしら。父の体面も考えてあげないと」

「いや、母の気持ちを考えると、その方が自然だと思う。親父は一度も、この病院にあらわれなかった。あんな親父に喪主の資格はないよ。母の死までもカネ儲けの材料にしかねない。僕が会社でどれほど恥ずかしい思いをしてるか、おまえにはわかってもらえないだろうが、僕はこの機会に親父と義絶してもいいと思ってるんだ」

霊安室はまだ二人だけだった。

「そろそろ、田宮が駆けつけてくると思うの。田宮の意見も聞いてあげて」

「……………」

文彦はどっちつかずうなずいたが、決意の強さがひき結んだ口元に出ていた。

治子が吐息を洩らした。

文彦の言ってることは正論だし、感情論としても理解できる。しかし……と治子は思うのだ。

實際問題として、文子も文彦一家も、そして治子自身も、スギリョーの傘の下でぬくぬくとしている現実から目をそらすわけにはいかない――。

二流私大出の文彦が大手広告代理店の東通に就職できたのも、スギリョーのコネだし、文彦一家が住んでいる三田のマンションもスギリョーの所有物だ。文子がスギリョーから受けていた経済的な支援があればこそ、治子も少なからぬ恩恵を受けてきたのである。

母のお葬式を兄が取り仕切ったあとで、怒り心頭に発した父に、なにをされるかわかったものではない。

頭に血をのぼらせ、激情に駆られたスギリョーの阿修羅の形相を治子はこの眼で何度も見てきただけに、文彦の提案は非現実的に思えた。

『ふざけるな！ 出ていけ！』

治子はぞくつと身ぶるいした。

スギリョーが髪振り乱して、絶叫する場面を目に浮かべたのだ。

4

ほどなく田宮大二郎がトレンチコートを脱ぎながら霊安室に入ってきた。

田宮は三十七歳。苦み走った顔が弔意をあらわして深刻に歪んでいる。

「母は苦しまずに、安らかに逝ったわ。昨夜、ロスと一緒に行って、ガラスの教会の結婚

式でわたしのウェディングドレス姿を見たときのことを涙ながらに話してた。それが母の最後の言葉になったのよ。よほど、印象深かったっていうか、うれしかったのねえ」

田宮も往時を思い出して胸が熱くなった。

「ガラスの教会」とはロスアンゼルス郊外にあるウェイファーズ・チャペルのことだ。礼拝堂が総ガラス張りなので「ガラスの教会」と称されている。

田宮と治子は四年前の平成三年十月に「ガラスの教会」で結婚式を挙げた。当時、田宮は、産業経済社の社員だった。「聖真霊の教」の本山で挙式しろ、と言い張る杉野の命令にそむいたことになるが、娘の晴れ姿を見たい一心で東京からたった一人同行した文子にとつて、それが生涯の思い出になったのだろう。「クビ」を覚悟で、治子の希望を容れて、ほんとうによかった、と田宮は感激したものだ。田宮は挙式の半年後、別件で産業経済社を辞職せざるを得なくなったが、いま顧みても、「ガラスの教会」の結婚式は悪くなかった、と思う。

田宮は、文子の死顔に掌を合せてから、椅子に腰をおろした。

「ガラスの教会」はお母さん孝行をしたことになるんだねえ。主幹にはずいぶん叱られたけど」

田宮は義父の杉野をいまだに「主幹」と呼んでいた。

治子が田宮に告げた。

「兄が母の遺体を三田のマンションに引き取ると言ってるの。喪主も兄になるそうよ。父に